

バーン=ジョーンズの大学時代（モリスとの友情）

デザイン学科

白石 和也

Burne-Jones: Friendship with William Morris in College Days

kazuya SHIRAISHI

バーン=ジョーンズは神学や教会史を研究し、オックスフォードを発端とした高教会派運動について知りたいと思ったが、この宗教的な時期は間もなくして次第に薄れていくことになる。文学興味については依然としてギリシア神話を愛していたが、それにロマンチックなゴシック趣味が加わったことは確かであった。『オッシアン』から北欧神話、ウォルター・スコットが自作を加えて集成したスコットランドとイギリスの国境一帯のボーダー・バラッドなどを愛読し、想像を豊かにしていった。そして自由な時間には近所の墓地の崩れかけた墓石のバラッド（通俗な詩文）を熱心に朗読してみたり、親近感のあるこれらの内面的遍歴が、彼にとって魅力あるイメージ世界を映し出すのに役だつことになる。

次第にロマン主義の詩人たち、特にキーツ、コルリッジに親しむようになり、そうした詩人たちの作品が中世の芸術や文学を示唆する特色があり、さらに十九世紀的な憧れも具現していると感じるようになっていった。従って40年後にバーン=ジョーンズが描くことになる図像にもこれらの詩人の住む城の神秘的な空間を甲冑の騎士たちが行き交うイメージが現れるのも当然のことであった。

バーン=ジョーンズの未来に決定的に影響することが、このところの数年間に起きつつあった。ある日、彼がモリスの「どっちは確かでないが」マロリー著『アーサー王の死』の一冊にて

くわしたのである。二人とも熱心に読んだが、その経験は二人にとって重要なものであった。確かにバーン=ジョーンズにとってそれが何を意味するのかを、この時点で過大評価することはできない。『アーサー王の死』は彼の魂の高貴な大志と、彼にとっては自分が空想したとりわけ美しい夢が申分ない形で組み合さったものであった。彼の賞賛は異常にとっぴなものであったが、文学的、あるいは芸術的には彼の時代と共有されるものであり、作家によって400年もなおざりにされたアーサー王の伝説が十九世紀に再び文学的人気の最高潮に達し、とりわけテニスン、アーノルド、モリス、それにスウィンバーンたちを鼓舞したのである。彼らをこのように連れ戻したのはその象徴的な潜在力であった。ロマン主義の作家たちは現代や、十九世紀の先駆者たちを鼓舞した社会的主題に背を向けて、むしろ人間の精神生活「いわば孤独な魂の夢や熱望、不安、幻想などをすすんで問題にするようになっていった。するとこれらは直接に表現できないので、芸術家は象徴で表さねばならない。それなら民話や古代神話に見出せる基本的な人間的状態の象徴による方がどれだけ良いことか！ ロマン主義においては「前時代には重大な目的によって相手にもされなかった」これらの伝説や神話が芸術家の没頭するとりわけ深い重要な表現手段として人気を集めたのである。

何の伝説や神話とその目的にとりわけ適当なのであろうか。ギリシアやローマのこうしたものは

数世紀に及び伝統的な材料になった。それにロマン主義の詩人たちもそれらを象徴的に利用した。しかし多くのヴィクトリア朝の人々にとって中世、特にアーサー王伝説に比べてそれらはあまり適切でなかった。先ず第一に、これらはキリスト教の伝説であるか—あるいはそのように発展されたか—で、ヴィクトリア朝の詩人たちはほとんど正統派でなかったものの、宗教には深い興味があったし、キリスト教の伝統を継承し、道徳性もその基盤上にあった。彼らは罪とか贖罪（しよくざい）や救済を非常に問題にした。さらにヴィクトリア朝のロマン主義者たちはロマンチックな愛を深く信じ、そのためにまたアーサー王伝説における愛情物語が古典的神話に見出せるどんなものよりも象徴を提供してくれた。従ってテニスンはマロリーの物語を様式とし、それによって彼の生きるその時代を当惑させる道徳的諸問題についての見解を表現した。そしてスウィンバーンの手法はトリスタンとイゾルデの物語を何か無限に壮麗であると同時に必然的に不幸に通じる無法則な情熱に関する世紀末の見解を伝えるなかだちとしていた。

アーサー王物語は古典神話よりロマン主義にとっては別の利点もあった。それらは遙かに神秘的なものであり、古典神話はどれも説明されるものであった。テーベの婦人たちが狂気に襲われたとすれば、彼らの王であるペンテウスがディオニソスを侮辱したからであることが分る。これらのアーサー王のような北欧伝説は—少なくとも十九世紀の一般の読者にはこのようになぜか説明されない、ベディヴァ卿が刀を湖水に振り下げると、白い衣に包まれた腕が水から出てそれを掴んで水のなかに引きずり込んだというが、その腕が湖水の貴婦人の腕だと分っても—彼女が魔法使いなのか、妖精なのか天使なのか、そしていかなる力があるのかは神秘に包まれたままである。こうしてロマン主義者たちは彼らに説明がつかない多くのことを相手にした。結局はそうでもない限り内面的精神の働きを理解する人がいないからであろうか。だから彼らにとってはこれらの神秘的な

北欧神話がギリシアのよりは伝えたかった内面的真相にもっと近い象徴を提供したのである。コルリッジの、あの老水夫が表現したような善悪の隠された不可解なドラマの観念はいかなる古典的物語も表現できなかった。キーツのときには応えられない魅力があり、また破滅的なこともある男女愛を魔力とする見解はギリシア伝説が決してできなかった具現化であり、それを「つれなき美女」（1819）のバラッド（民間物語詩）に見出せたのである。

『アーサー王の死』における神秘的とキリスト教的気質が特にバーン＝ジョーンズにアピールした。というのも彼には徹底的なロマンチックな神秘が美の欠かせない要素であり、彼はキリスト教の教理における信仰を失いながら、道徳的共鳴においてはキリスト教徒のままであるといったいかにもヴィクトリア朝の人間であった。バーン＝ジョーンズは人生をキリスト教徒の面で理解していた。だから探し求める精神的な救いは、慈悲、謙遜、哀れみのキリスト教の具体的な美徳の助けをかりて獲得できるのであった。それ自体が間違いを正し、神の名と自分の婦人の名誉において、王の命令を受け、弱きを助けると誓う騎士の使命をもった人物によって適切かつ高潔に表されるものであった。何といてもキリスト自身が最後の晩餐で用いた神聖な器が、命に限りある人間に先見を伝えるかすかな光を発し、何にもまして悪習などを誓って止め、聖杯を求めに出かける気持に駆り立てる聖杯（サン・グレイル）物語の概念が彼には特に有意義に思えた。聖杯は理想化された善の象徴である—というのも彼自身のような芸術家にはそれが理想の美と同一視できるものであり—やむに止まれぬ彼の実行すべき義務に感じられたのである。すなわち理想の美というのは、束の間で稀にしか姿を現さず、この地上よりは別の世界から光を発し、知らぬ間にやって来るほのかな姿なのである。若い頃から彼の英雄はガラハッド卿であり、人生の終焉の瞬間までサン・グレイルの物語はユニークな情緒によって彼の心を動かし続けた。亡くなる一年ほど前に彼は「主よ、

どうしてあのサン・グレイル物語は私の魂や思想から離れないのであろうか…一体この世にそれほど美しい美があろうか？」と書いた。最初に読んだマロリーのその素晴らしい作品が彼の想像的原動力のパタンを形にする主役を果たしたのである。

バーン＝ジョーンズはモリスと親しくなるにつれて、彼も宗教と詩作に興味があり、牧師になろうとしていたが、オックスフォードに失望したことが分かって胸のわだかまりが融けるような気がした。二、三週間内に二人は非常に打解けて親友になりたいと感じるようになり、モリスはバーン＝ジョーンズをネッド (Ned)、ネッドはモリスをストウ夫人の1852年の小説『アンクル・トムズ・ケビン』に出てくる黒人の少年のちじれ頭を思い出してトップシー (Topsy) と互いにあだ名で呼び合うことにした。間もなくしてモリスは自分ほど裕福でないネッドに苦楽を共にしようと誘ったが、ネッドはそれを断った。しかし彼はその申し出への感謝の念によってトップシーとのきずなをさらに親密にした。そうしてこの友情は生涯続くことになる。それは同質の趣味と相補的な傾性などの最良の基盤に築かれたものであった。二人とも趣味は同じで、中世やお伽噺や競馬や悪戯好きで、十八世紀の鉄道や近代工業文明を憎んでいた。しかし二人の気質は対照的であった。ネッドは神経質でもの静かな内向的な人物で、いささか女性的でもあったのに対して、トップシーは外向的で激しく荒々しく精力的な男性といった感じだが、こうした表面的に現れたもの以外に複雑で無防備な性格を秘めていた。モリスにはまた気遣いの感覚過敏性の素質もあって、それが詩作のなかに時折ちらりと現れ、一淋しさの意識、愛されたいことへの渴望となって人間宇宙の哀しさ、無常観への鋭い意識に悩まされることになった。この過敏性の素質が他の積極果敢で明らかに外向的な性格との戦いとなり、その抑圧に最善を尽くしたというのが実情のようであった。その結果、他人と本当に親密なつきあいができなくなることもあった。すると彼は直観的に他との関係を断ってしまうようになり、どちらかというと考えること

を好みだしたのであった。それで親愛の情の厚い若い衝動があっても、何か非人間的なところがあり、彼の目が鳥のようであったというのも、根拠がなかったわけではない。モリスのこの非人間的な素質がバーン＝ジョーンズとの関係にも後に現れてくる。

しかしこの初期の段階での友情は互いに有難いものであった。ネッドはトップシーに同情を、トップシーはネッドに自信を与え、友情は最高に深まっていった。モリスの才能はオックスフォード大学時代からいち早く成熟を見せていた。彼は最初の詩を制作して、バーン＝ジョーンズに見せて熱烈に感激させ、モリスはバーン＝ジョーンズの素描を賞賛した。こうして見せ合った作品よりもっと互いが影響したのは共有していた内面生活であった。モリスも自分が空想で創り出した同様な世界に大いに住んでいたし、ヴィクトリア朝のイギリスに嫌気がさしていたし、気分を一新させるためにお伽噺や中世の伝説に救いを求めていった。二人は精神的な才覚を共同で働かせることで二層の発想をすることができて、両方の夢の世界が拡張され強化されたのである。そうして二人が現実の周辺で見た世界に全身全霊で反対し、はっと驚かせるような宣言をし、それが後代の想像力をもつき動かした。音楽において明白な不協和音が調和したとしたら稀な曲が創造されると同じように、そのことは二人の人生にも当てはまった。

バーン＝ジョーンズの人生にとって1854年は、古いことが去り新しいことが彼を深く感動させた年のようなものであった。彼は週に一回くらいは父親に定期的に手紙を書いていつものことは知らせていたが、一月末に書いたバーン＝ジョーンズの手紙では、まるで父親の腕に身をなげかけるかのように、年の違いとか親密な関係も情熱的な感激に圧倒されて、冬のさ中にも不意に忘我の状態におち入った。その時のことを次のように書き送った。

「学期ごとにいつも訪れているゴッドストウの廃墟と麗わしのロザモンド (ヘンリ二世の妃) の埋葬地の巡礼から帰ってきたところです。時代が過ぎ去っても壮麗さはそのままです。その川辺で

嬉しさのあまりの忘我の状態にふっと気付いたら、その土地が明るく鮮やかな色彩で魅惑に溢れていて、空の青と紫と俄雨が黄金の粒を舞わせてるかと思うと、西よりの穏やかな風に波立つ水面がきらきらと映えて、僕の脳裏には修道院、信者の長い列、十字の御旗、コープ（大外衣）と司教杖、川辺の華やかな騎士や貴婦人、鷹狩り、そして黄金時代のあらゆるきらびやかな昔の情景が浮んできて心が乱れ、狂おしくなって夢から醒めようと、川に石を投入しねばならなかったのです。このようないわく言い難い状態を覚えたのは初めてです。それがあまりにも強烈で、苦痛を覚え、額が割れるかと思いました。そして夢想するのが怖く、鮮明すぎて想像ではなく、思い出のようにも思えたのです。それが30分も続いたのも初めてです。すると遠くから現世の鐘の音が聞えて、ほどなく汽車が走るあたりの木々の上に蒸気の輪も見えて、自分が生きている確信の持てない、この時代に呼び戻されたのでした」⁽¹⁾。

これらは強い言葉だが、強すぎることはない。モリスとオックスフォードの建物の相乗効果によって、バーミンガムで子供時代を過ぎた若いバーン＝ジョーンズは想像的な陶酔の状態に駆り立てられた。それが読書によってさらに強烈になり、彼は一年内に自分の宗教や歴史の書物を放り出し、詩の深い世界に飛び込んでいった。モリスと彼は互いにチャーサーや共鳴している同時代の著者たち — チャーサーには決して飽きることなく — の著作を朗読し合った。キーツ、コルリッジに加えてもっと最近のラスキンやテニスの二人の作品を読んだ。モリスがバーン＝ジョーンズの所へラスキンのエジンバラ講演の原稿の一部をもって走り上がって行き、直ちに互いに朗読し、最後までそれを続けた時のことは二人にとって忘れ難い朝になった。その日以来、ラスキンは彼らの考えのよりどころとする同時代人になった。ラスキンは彼らのなかで数年来かすかに蠢めいていた考えや感情を巧く言葉にしてくれた。彼は何と壮麗で雄弁なゴシックを謳い上げ、近代

の機械製を口を極めて罵ったのであろう！ しかも彼はそれをあっさりの良い趣味の名においてやってのけたのでは決してなかった。彼は真のヴィクトリア朝人らしく、道徳の名において自分の見解を主張したのである。鉄の建物は醜いどころではなく、よこしまであると彼は言った。モリスもバーン＝ジョーンズもヴィクトリア朝の人間であったので、心からそのことに賛成であった。

ラスキンは彼らの考えを歯切れ良く表してくれたが、テニスは彼らのヴィジョンを具体化していた。イギリスの風景をお伽噺と伝説の人物たちが往来する地域を繊細な正確さで考察して鮮明に描写してくれていたのである。

川ひと筋の両側に
野にも丘にも麦畑、
丘を装い空まで続く麦畑、
畑の中の街道の末は
塔が幾つも聳えるカメロット城。

行き交う旅人は、
蓮の花咲く川中島のシャロットを
眺めて登りまた下る…

カメロットへの道中で
調子で歩む鞍敷きの馬上で
乙女うち連れ、さわぐ僧院長
見かける時もある。

卷毛の若い牧羊者
長髪、装い紅の騎士従者
並び駒打出す時もあり、

武者姿も空の鏡に映えて
騎士も二騎づつ進みおり…

On either side the river lie
Long fields of barely and of rye,
That clothe the wold and meet the sky;
And thro' the field the road runs by

To many-tower'd Camelot;
And up and down the people go,
Gazing where the lilies blow
Round and island there below,
The island of Shalott...

Sometimes a troop of damsels glad
An Abbot on a ambling pad,
Sometimes a curly shepherd-lad
Or Long-hair'd page in Crimson clad,
Goes by to tower'd Camelot;

And sometimes thro' the mirror blue
The knights come riding two and two...

美の観念が儂さの認識や思い悩む後悔にまでいたった感情と混じり合う、いかにもテニスらしい感傷的な傾向にもバーン＝ジョーンズは反応した。

涙、なぜかこぼれる涙、むなしい涙よ、
浄らかな絶望の底から湧き出る涙よ、
胸にこみ上げ、両目に溢れる。
帰らぬ日々を思い、色めく秋の野を眺めやるとき。

Tears, idle tears, I know not what they mean,
Tears from the depth of some divine despair
Rise in the heart, and gather to the eyes,
And thinking of the days that are no more.

「文のなかに散在している言葉が、ある時突然に襲ってくる、言葉に尽くせないような感情、それにシュレゲルが〈尽きせぬため息〉という名称で書いた、つまり知ってみれば言葉に尽くせない安堵の気持になり、詩人が他では苦渋して言語に絶したのを、まるで靈感を得て、表せる何か古代北欧の言葉をふっと思いついたさいの感じと不思議に符合していた。いうまでもなくプリンセス〈Princess〉の一節が注目される。〈Tears, idle tears...〉がこの類いである。ある夏の暑いおぼろ

げな午後にそれを数時間も思い巡らして、ついにこの上なく惨めな気持になってしまった……」⁽²⁾。

「この上なく惨め」 — というのはバーン＝ジョーンズが審美家であり、皮肉屋でもあることを示している。ロマン主義に戯れの感覚を静めてしまうことは決してなかった。彼のしゃれた空想の飛翔は戯れやひらめきで変化を添え、さらに溢れんばかりのエスプリ（精神）を噴出させることも多かった。これは兄弟団の他のメンバー、特にモリスにも当てはまった。いかにもオックスフォードでの生活らしい特徴は — 記録にもあるように — それはユニークな混合というわけではなかったが、繊細でロマンチックな空想と騒々しい男性のお祭り騒ぎとの奇妙でちぐはぐなものであった。古代人たちにもすでに分かっているように、詩作と神秘主義には冗談と滑稽なシャレード（身振で当てるジェスチュア・ゲーム）がつきものであった。しかし彼らの生活における対照には鋭さが目立った。古代のに比べると彼らの芸術は遙かにひ弱で熱望の関心事に過ぎない一方、他は特に旺盛で男性特有の楽しみ、全般的にはボート漕ぎのクルーやフットボールのチームなどと結びつく類いであった。「Tears, idle...」のような詩の朗読に専念した夕べの後に若者たちは、レスリングやボクシングをやり、バーン＝ジョーンズの先導で、窓の方へ走り寄り下を通りかかった不運な仲間の学生たちに水盤の水を浴びせることもあった。「とんでもない面白さだ！」と彼は叫ぶのだった。彼らの話す言葉は俗語っぽかった。また皆にあだ名があり、美女は「スタナー（素晴らしい美人）」、詩は「グラインド（精根を尽きさせる）」であって、「トプシー、君のグライズを読み上げろよ」。などとバーン＝ジョーンズは宣言し、モリスは個性を殺して唄うような口調で美女の話の謳い、ジョースト（馬上槍試合）よろしく、もったいぶった古代的な言葉で表現し合ったものである。彼が読み終ると、一同はくだけて、熊のじゃれ合いを彼にけしかけてそれがかなり続くのであった。

ペンブルックでの夕べとプライスとの通信が再びはじまった。その学期の初期にバーン＝ジョーンズはバーミンガムにいる友人のニュースを受取る喜びを述べている。少し後に彼は「私の読書はまだ非常に限られています。事実、あまり話題にする資格はないかも知れませんが、恥かしいながらも、一つのこと — 例えばポーが私にける魔法のことを書いてみましょう。彼の恐怖に関する本が私のところにあります。そのような著作が趣味性のあらゆる規則にどれほど反するかは私も知っています。しかしその恐ろしいなかにも何か繊細な精巧さが満ち溢れているのです。その魔術 — そのような陽炎のような作品は一時的なもので、きっと一日か二日で疎んじることになるでしょう。しかし読んでいる現在は完全に虜にされてしまうのです。

もし彼の出版されたばかりの全集を見たら、彼の分析の概念や別の思想を伴う個性を例証するものを特に読むとよいのです。例を上げると『モルグ街の殺人』や『盗まれた手紙』は特にです。『黄金虫』は — 美しい話です。『大渦巻き』と『落とし穴と振り子斧』（特にこれは）その他の数作はびっくり驚嘆です。『アシャー家の没落』は非常に素晴らしく、私の好きでたまらない作品です。『催眠術の効果』や『黒猫』その他の一、二のようにとっても賛成できないものもあります」⁽³⁾と書いた。バーン＝ジョーンズのこのような無頓着な予想にもかかわらず、彼のポーの作品に対する評価はいつも高いものであった。従ってポーの死後に出された荒っぽく不正確な研究論文は彼に深刻な嘆きを与えたようである。彼はそれを読んだ日は人生でとりわけ惨めな一日であったという。随分と後になってのことだが「それがたまたま雨の日で、それを読んだ後は退屈にしていられない気持になって、台所へ行って体を暖めたり、暖炉の赤い照り輝きに慰めを求めようとしたが役立たなかった — あのような美しいものを書いた人なのに、どうしてだろう」⁽⁴⁾と話した。そして1874年にイングラム版のポーの「生涯」が付いた作品集が出版されて、この非難が反論されているのを

知ったバーン＝ジョーンズは、その本を買いに急いで出かけたという。

プライスはバーン＝ジョーンズの論理性や形而上学へのごく自然な強い傾注や論争の技巧、すなわち敵対者への暖かい友情と、自分自身が敗者であることを明言し、議論において咎め立を決してせず、難しい用語も使うことのない態度を身につけたのには、どこでどれだけ彼が勉強し修養を積んでその能力を強化したかが分からないので、驚かされてしまうと述べている。しかしこの時に彼は議論に費やす暇がない交際に大きな喜びを感じるようになった。彼に必要な特別な励ましはモリスへの共感を通して可能になったのである。二人はしっかり心に留めておくべき事柄を文字どおり昼も夜も話し合った。だが彼らの交際は仲間たちと協力しながら先導することも必要であったので、オックスフォードでの初年を終る頃には、以前にあまり問題にしなかったことも論じることにした。

正月に再会したモリスについて最初の友人とまったく同じ寛容さで書いている。「モリスは非常に沢山の時間を私と共有している。彼は私の知っているなかでとりわけ才気のある友だちの一人であり、彼にとっては以前に幸運にも会った誰よりも思想や好みで気心が遙かに合う — 芸術や美学における彼の趣味や批評は全般的にいて、そのような主題ではかつての自分の理想であったフルフォードのより、いつも限りなく好ましいものである。聖なることでも美でも真実でも、それらに対するとりわけ絶妙な知覚と判断への熱烈さが稀に充実しているのである。私の精神自体のあり方を彼独自の美で染めてくれる彼のような友情に恵まれた覚えがなかったので、天に感謝しなければならない。まわりに彼が発するロマンチックな雰囲気壊す、騒々しく狂気じみた癩癩と発作がなければ — 彼は少なくとも私の — 申分ない英雄である」⁽⁵⁾と述べ、このことでバーン＝ジョーンズにとってモリスがとりわけ大切になったことが分かる。

バーン＝ジョーンズが後になって回顧している

ように二人は「絵画について何も知らなかった」。「ある朝、自室で読書していたらモリスが新刊書を持って駆け込んできた。そのおかげで、彼が私にその本を朗読し終えるまで、他のことはすべて棚上げされた。その本で私たちは初めてラファエル前派について知り、そして私はロセッティの名を初めて知ったのである。その後は何日も他のことはほとんど話題にせず、二人ともまだ見たことのない絵についてひたすら語り合った」⁽⁶⁾と彼は1854年に語った。その本というのはラスキン著『エディンバラ講演集』で、彼が1853年11月のエディンバラでの連続講演を集録した建築や絵画に関する講演文を集めたものであった。それから間もなくして旧約聖書の創世紀にある一挿話を描いたラファエル前派の画家の一人、ミレイの「方舟に帰った鳩」(1851)がハイ・ストリートにある店に展示された。その講演集のなかでラスキンはラファエル前派について次のように述べていた。

「…ラファエル前派の風景画はすべてその最後の一筆まで、野外で事実そのものから描かれている。その人物画もたとえどんなに表現を凝らしていようとも、ある生きた人物の真の肖像画である。微細なアクセサリ（付属物）のすべても同じ仕方描かれている」⁽⁷⁾。それでこの派は他の画家たちの反感をかい、激しい非難を受けてきたのであるが、その主要な理由の一つに、このような制作方法をとった場合、当時のぞんざいで不完全なやり方に比べて、膨大な労力が画家に要請されるからだというのである。ラファエル前派の、細部を入念に描き明るく人工的に彩飾する絵画は、実際にはきわめて不自然なものだが、それをターナーの賞賛者であるラスキンがこう述べたのは、恐らく、写真のような厳密な描写を心掛けたからといって、それにかかる苦労がいかに大変であっても、その苦労のために必ず良い絵ができるというわけでないということを強調したのであろう。ラスキンはさらに「…欠点は色々あるが、彼らの絵画はターナーが亡くなってこの方、ロイヤル・アカデミーの壁に展示されたなかでは最良 — 他にこれに匹敵するのがないほど最良のものである。

そしてシェイクスピア作『尺には尺を』に取材したハントの〈クローディオとイザベラ〉(1850-53)のような作品は、美術史のいかなる時代のものでも比肩しえない — ある点では決して近付きえなかった — ものである」。この当時のラファエル前派は自分たちの原則にあくまでも忠実であろうとした革命的集団であったので、これを読んだ若者たちは胸を躍らせた。

1854年の初期にはオックスフォードでの騒々しさが落ち着いてきたので、バーン＝ジョーンズがその後深く考えてみると、これまでに彼がしっかりと頼っていたよりどころが失われだしたことに気付いた。プライスは彼が経験した宗教的な当惑がまさに苦悶いがいの何ものでもなかったことを述べている。ある時など彼は困窮にさいなまれて問いかけをまったくしなくなり、ひとまとめに長老教会の教義をすぐに受け入れてしまおうとしたこともあり、また他の時はニューマンの弟子で旧友でもあり、見識も広く徳も高いセント・メアリー牧師、チャールズ・マリロットに相談しに行ったこともあった。この面談によっていくらかは安心したが、疑問を挟まない誠実で熱心な日々は失われて行った。モリスは外国に、コーメルはバーミンガムから離れたところにいたし、バーン＝ジョーンズは長い休暇によって自分の魂との霊的な交わりの余裕が与えられた。彼はロンドンの叔母をいつものように訪問した後は、自分の父親の家で一人静かに過した。彼の芸術的人生の第一歩である作品計画がすでに始まっていることを、その時に書いた手紙が伝えている。モリスはあり余るエネルギーの解消法として、オーリエル小路にあるマクラレンのジムでフェンシングやシングル・スティック（フェンシングの一種）をしていて、すでにそうとう強くなっていた。彼の攻撃から身を守るには相手との間に机の障壁を設けておく必要があるほどであったと彼の友人の W.H. ブリスが回想している。バーン＝ジョーンズもそこで気晴しを始めたが、彼はその手ほどきを受けていた奇人のアーチボルド・マクラレンから、むしろ絵を続けた方がましだと忠告される始末であっ

た。彼はバーン＝ジョーンズにサマータウンの彼のところを訪れるように頼んだが、そのバーン＝ジョーンズの答えは次のようであった。「貴方のお誘いは大変に嬉しく思います。今は静穏に過しているのですが、家を離れると落ち着かないようにも感じます。ケンブリッジ、他はリースターとヘリフォードへの同様な誘いがありますが、約束の優先順位や、共通の仕事への共鳴の度合いからしまして、お受けするとすれば、貴方の仕事になります」⁽⁸⁾。残念なことに、現在はこう書かれている便箋一枚しか残っていない。

バーン＝ジョーンズはロイヤル・アカデミーの展覧会でホルマン・ハントの「良心の目覚め」と「この世の光」などを見て、その年は印象的であったと述べている。さらに他の文章には「ランシアはスコットランド高地の衣裳を着けた関連のない王室家族を加えて時間を空費しています。彼は主題が概念に特に必要なのか、あるいは美的な処理をそれに釣り合わせるができることを、またそれを毎年つづけることを学ぶのでありましょうか。マクリースは、一少ない方がかえって効果がある歴史的事実を図説するただそれだけの理由で、人物をずたずたにし、しかも大勢の鋼鉄の兜を被せた無意味な顔でカンヴァスを埋めつくしています [ストロングボウとエヴァの婚礼]。南フランスの詩トルバドゥル（吟遊詩人）のベルトラン・ド・ボルンが月光を浴びてハーブに合せて歌っている心を慰める十三世紀の騎士道的恋愛を歌った絵がありますのに、現実生活では悪の権化であるのを、画家がどうして正典にしてしまわねばならないのでしょうか、と問いかけている。結局は馬鹿げた意味のない主題と、これらのもっと疑わしい人物、つまりは裏切者や強奪者の英雄戦士、あるいは心のない宗教の美とロマンなどが描かれている現在の、丁度良い時期に確かにラファエル前派が現れたと理解しています。能力不足な私が、彼らを弁護して、彼らに耳を傾けるように病人に要請したいのです」と続けている。

その後バーン＝ジョーンズはマクラレンの著書『妖精一族』の挿絵のためのペンで描く一連の90

枚ほどの下絵を依頼される。その本はヨーロッパの妖精神話のバラッドであったが、マクラレンはすぐにも出版しようとした。そのより自信のある根拠がえられるや、彼はすぐにその本の装丁より先に、あまりよく知らない人に実験的なイラストレーションをさせて見ることに決めていた。それらを描くためにバーン＝ジョーンズはリチャード・ドイルやターナーからさえ調度品の絵を借り、全体的な雰囲気にはウォルター・スコットやシャーロット・M. ヨング、フケなどの折衷をした。そして絵全体の雰囲気にはラファエル前派の画家やロセッティの影響が見えていたので、彼はその一貫性のなさを痛感し、60枚ほどの絵を完成したものの、とても出版には耐えない、とその本が出版されたさいはその内の3葉しか載せなかった。

さらに1854年に水晶宮が将来の一本化されるべき発展の期が熟してきたかのように語られるのを聞いて「…私は部分的に満足なものもあり、許せるものもあったが、全体的にはほとんど自慢できない代物であり、未来の世代がそれを宮殿だなどといえば、可愛そうな奴だ！ と言うにちがいない…大きな温室に過ぎないのに、それを詩的な言葉で宮殿といえば、彼らは笑うに違いない。鉄骨とガラス、ガラスと鉄骨の長々と続く気の滅入る単調さと途方もない退屈な巨体を見たさいに、私はそれらの材料や建築を達成させるための無能さをますます痛感した。私たちが賞賛できるのはその大きさであって、形態や色彩などを味わう原理にあるその真の要素ではない。その形態は必然的にごつごつしていて機械的であり、色彩は透明で苦しいほど反射が眩しい。それは芳香性の灌木やちょろちょろ出る噴水、メリンス、オーデコロン、ギリシアの立像、苺アイス、プラスチックなどを囲むのには適するかも知れないが、〈この世の光〉やウェストミンスターのアプスなどを当てがって欲しいものだ」。ギリシアの立像をオーデコロンと一緒に持ち出すからには、彼がギリシア芸術の研究に本格的に取り組んだのはこの手紙の随分後のことだと思える。その後は彼が友だちに御無沙

汰した理由を書いていた。10月にコーメルにオックスフォードで会う少し前に彼宛に書いた手紙には「君が手紙をくれたときは、以前に覚えのない大きな精神的苦悩を経験していたのだ。僕が音沙汰がなかったのは、わざとでも不注意でもなく、友情を考えると悲しみを君の耳に入れたくなかったにすぎず、僕が愉快的な手紙を書く気がしなかったのを分かってくれるだろうと、ここで敢えて書くことにしたのだ」⁽⁹⁾。

幸運にも秋学期の初めにモリスとバーン＝ジョーンズは隣どうしの新しい部屋に移るさいにバーン＝ジョーンズは「自分の所有物の半分でもなくならないように見ていたので、一日中忙しい用事があった。こんどの部屋は前のに比べて大いに良くなった。入学以来、これまでの学期は何か工夫して待っていなければならなかったのです」とサンプスンに書いた。それはエクセターのなかの、現在では随分前に取り壊されて、それに代って陰鬱なゴシック復興の体裁で建てられた建物になっているが、かつてはオールド・ビルディングズという名で知られた建物にある部屋で、木が植えられた小さな空き地の向うにはブロード街が見渡せた。バーン＝ジョーンズはそのオールド・ビルディングズをこのように描写している。「切妻屋根で壁はペップルダッシュド（小石打込み仕上）の今にも倒れそうな古い建物であった。階段から小っぼけな暗い通路が伸びて居間に通じていたが、踏み段を二段下り、一、二歩進んで今度は三段上がれる。すると顔が扉にどんとぶつかる。そして部屋の中に入ると、窓際の腰掛のあるところが二段高くなっていて、寝室は二段低くなっている。実に楽しい所だった」。

ここで夜に彼らだけの時は友だちどうしでチャーサーを読み、昼間はボドリー図書館に彩色手稿本を見によく出かけた。古い年代記も、それから中世について書いたものなら勿論のこと、何でも彼らは貪り読んだ。だが後に彼らの生涯の多くを占めることになる二冊の偉大な書物『アーサー王の死』と『ニーベルング家物語』はかなり後になるまでまだ目にしていなかった。

ペンブルックでのフォークナーの部屋の夕べは別の雰囲気があった。そこにはメンバー全員が集ったときのことを「詩作やあいまいな芸術的、あるいは文学的大志の共通基盤」について話したが、それぞれに自分たちの世代の世界で何かをしようという考えがあった。エクセターの二人が見える世界の美を問題にするのに対して、他の者は「もっと大きな他へ目を開く」ことを考えていたとカノン・ディクスンが述べている。この表面的には誠に順調な、他への思いやりや共鳴の奥にあったバーン＝ジョーンズの不安や自己探索の心はあまりにも深刻でモリスにさえ話せなかった。彼は「そのことは話題にせずに、ゆっくりと、ほとんど目に見えないほど徐々に、二人とも聖職の生涯が自分たちに向いてなく、芸術の方がますます毎日に自分たちの心を支配する成り行きに任せたとように思える」と述べている。そのような危機的な時期にはすべてが暗く見え、健康状態も良くないのも道理である。しかし広い世界に開眼し、その中の自分の位置と義務のありかをゆっくりと発見したことが彼らの人生の夜明けであったといえよう。

1854年10月にコーメル・プライスはブレイズノウズ・カレッジに上がった。（ハリー・マクドナルドは学寮の奨学資金を得て6か月早く行っていた）。モリスがはっきりと加わったバーミンガムの仲間たちが全員そろった。「モリスは最初から彼に惚れ込み、私たち皆がそうであったように、彼にいつも変らぬ好意を寄せ、優しい態度を示した」とその時の喜びをバーン＝ジョーンズは書いている。そしてこの冬学期にモリスの詩が初めて話題になった。

バーン＝ジョーンズはその年の11月に「昨日はモリスとスミス。兄弟団に加わるべきもう一人の人物。と素晴らしい散歩に行った」と書いた。しかし1855年5月には、プライスが友人に宛てて「スミスが極端な宗教上の自由主義の見解に変革したので、私たちの修道院計画は残念ながらご破算になりそうです。…モリスはその教義の点で異議を唱えるようになったし、テッド（バーン＝

ジョーンズ)は聖職を授かろうとするにはあまりにもカトリック的なので、日増しに彼らの意見は割れてきています。二人の友情は変わらないのですが」と書くことになった。事実、バーン＝ジョーンズはその頃は袋小路に陥ってしまい、クリミア戦争の期間に大学人に開かれていた将校の職権の一つに応募しようとした。「殺されに行きたかった」と彼は後で言ったが、身体的に不適格と診断されて不合格になってしまったのである。

5月末にバーン＝ジョーンズはロンドンにロイヤル・アカデミーの展覧会を見に行き、彼の叔母の家にプライスを連れていったが、プライスは寂しい生活をしてきた彼女に非常に気に入られた。その間にモリスもロンドンにやって来た。彼はモリスと一緒に「トッテナム・グリーンにある非常に奇麗で古風な屋敷に住んでいて、ラファエル前派の絵画を何枚か所有しているウィンダス氏を今朝訪れて楽しい時を過ごした。そこで私たちは初めてマドックス・ブラウンの〈イングランドの見納め〉という、移民のためにイギリスを後にする船上の夫婦の思い詰めた表情を描いた絵画と、ミレイのそれ以来見たことがない女性の小さな美しい素描とを見せてもらったが、私たちは心強く思っただけで帰ってきた。丁度その頃は、植民地への移住案が巷に広まっていて、一種信仰じみた奨励がなされていた時期であった。また同年の夏季学期(4-6月)の終りに違いないが、クラレンドン・プレス(オックスフォード大学出版局)の社長のトマス・クーム氏の家で彼らはホルマン・ハントの「漁師小屋の傷ついたキリスト教宣教師」とオックスフォードのニュー・カレッジの修道院の一部を背景にしたサープリス(短白衣)のクームの友人の二枚の肖像画を見せてもらった。彼らの最大の賞賛的になったのは、ダンテがベアトリーチェの頭部を描いている場面を主題にしたロセッティの水彩画であった。「私たちはすでにロセッティの詩〈至福の乙女〉が載っているラファエル前派の機関誌『ジャーム』の一部を見つけていた。それで彼はたちまちに私たちのラファエル前派兄弟団の中心人物と思えた」とバーン＝ジョーンズ

は記している。

モリスが前年にもちだした教会を見に長い休暇の間に彼らは北フランスへ行く楽しい計画を立てた。しかしその学期が終ると、ヒーリーからの招待を受け入れてケンブリッジの彼に会いに行くことに決めた。彼は翌年『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』の編集人の一人になる人物である。バーン＝ジョーンズはテニスに会ったこともないし、よく知らなかったもので、その途上でストランド街の店その他でテニスの肖像画や他の資料を見つけようと長いこと見て回ったが、質の悪い小さな版画で我慢せねばならなかった。その後、彼は鉄道駅でモリスと会った。その途上の二人の話は「フランスの古い年代記」であったが、ケンブリッジの一日目の晩に二人は何よりも先ず小さな半円アーチの教会に出かけた。そして驚いたことに、そこでヒーリーに「ヘスペリデース」ともって初期の「南のマリアーナ」が載っている初版の『テニス詩集』(1830年)を見せてもらって満足だった。そして三、四日はとても楽しくそこで過ごした。

バーン＝ジョーンズはこのケンブリッジ訪問のすぐ後のモリスについて思い出している。その時にジョージアナはモリスに初めて出会ったのである。ロイヤル・アカデミー展で彼女は、モリスがミレイの火事場で消防士が子供を救出する場面を描いた「救出」(1855年)の前に立って細かく鑑賞していたところを目にした。「彼が立ち去ろうとしている時に〈あれがモリスだよ〉とヒーリーが言って、彼女にモリスを引き合わせたのであった」。しかしモリスは彼女のことをほとんど見ていない様子であった。「彼はあまり見かけないタイプのとても端正な容姿で—中世の王様の彫像を見ると私は彼をよく連想する—その頃はまだ口髭を生やしていなかったから、彼の顔立ちのなかでとりわけ表情に富む口元の線がくっきりとしていた。彼の目は気持を外に表すというより、いつも何かに見入っているように見え、彼の髪は勝ち誇ったようにカールしてうねっていた」。

彼らはフランスへ旅立つ前日の1855年7月18日

にバーン＝ジョーンズはチェルシーのマクドナルド家を訪れたが、ジョージアナは外出していた。彼女が玄関口に着いたさいにバーン＝ジョーンズが下の通りを歩き去るのが見えた。中に入ると「ジョーンズとモリスとフルフォードは明日フランスへ出発するのだそうだ。ジョーンズが今、訪れたところだよ」と聞かされたが彼女には分かっていた。そのフランスへの旅はバーン＝ジョーンズの経済的必要性から歩いて回るつもりであった。フルフォードとプライスの兩人に参加を促したのだが、プライスはついに参加できなかった。フォークナーとヒーリーとマクドナルドは次の朝モリスと汽車で落合うことになっていたのだから、バーン＝ジョーンズとフルフォードと一緒にその晩は過すことにしたが、バーン＝ジョーンズとフルフォードの二人は鉄道駅の近くの小さなホテルに泊に行った。そしてヒーリーはキーツの詩集を一冊持ってきて眠る前にそれを朗読した。

彼らはフォークストン、ブローニュを通過し、アブヴィルに直行して、そこに夜遅く到着した。翌日モリスは二人より早く起床し、二人に声をかけて朝食前に一緒に外出し、その町を見物した。彼らはサン・ヴォルフラムの塔に登り「この町の急勾配の屋根と不規則な街路、それから四方に広がる田園地帯の丘陵や明るい田野」の広々とした景色を一望した。わずかな時間であったが、バーン＝ジョーンズはその通りの一部を何とかスケッチした。彼らはその日の午後に出立してアミアンに向い、夕食前の一時間をアミアン大聖堂で過ごし、食後にもまたそこに戻った。フルフォードは家族宛にこのように伝えた「モリスは安らかな喜びでそれを見渡し…そしてジョーンズは感激のあまり言葉も出なかったほどです。日が暮れるまで—というのは、私たちは9時過ぎまでそこにいたのです—そこがあまりにも厳粛で、その美しさといったら、あまりにも神々しく人間的だったので、愛が恐怖を追出してきて、畏怖させることはありませんでした」⁽¹¹⁾。

しかし最初予定した徒歩旅行は諦めねばならなくなかった。アミアンでモリスは足を痛めてしま

い「街中の靴屋に呪いの言葉をぶちまける」ことになったのである。彼は毛織地の室内履きを一足買い、それを履いてクレルモンからボーヴェまでの約18マイル（約29キロ）の距離を何とか歩いたが、足の痛みがひどくなり、彼らは乗合馬車か汽車を使って旅を続けざるを得なくなった。7月22日の朝の日曜日にはボーヴェ大聖堂で正式ミサに出席して、その時の礼拝にバーン＝ジョーンズは深く印象づけられたことが一世代後に書かれた手紙文からうかがえる。

「ボーヴェを御存知ですか。世界でとりわけ美しい教会です。私はいつの日かまた—そのすべてを見なければと思っています。確かにきっと見ます。それにその行列—それにトロンボンの音—古風な歌声—などはこれまでにない、またそれ以来は聴いたことがない美しい音です—それに空気を震わす大きなオルガンの音—しかもそれが突然に鳴り響き、私は最後の審判が来たかと思いました—それから高い天井や、人間が作ったなかでとりわけ優雅といえる、長い照明具など決して忘れません。

それは何と良い日で、いかに私は生き生きと、若々しく感じたことでしょうか—それに青い蜻蛉がスケッチできたほど空中で長く静止したかのよう飛んでいたのです。あ—、若いということは何て面白いのでしょうか。確かに私の人生を語るとしたら、その日々で私を作り上げたなかでもボーヴェでの日曜日は、創造物を見た最初の日となりましょう」⁽¹²⁾。

ノートル・ダム大聖堂で進行中の改修工事のことが頭にあったモリスは、パリに寄るのを止めてシャルトルに直行しようと、主張した。だがバーン＝ジョーンズはルーヴル美術館に行きたがり、フルフォードはパリそのものを見たがり、結局モリスもクリュニー美術館があったので我を通さなかった。ボーヴェでヴェスパーズ（晩禱）に出席してパリに発った。次の日はフルフォードによると16時間も観光して研究に励んだという。万国博

の美術部門で7点のラファエル前派の絵画が出品されてるのを見て喜んだ。戸口に立つキリストを描いた「世の光」(1851-3年)を含むハントの作品が三点、ミレイのが三点、コリンズのが一点あった。しかし注目を集めていたのは十八世紀中葉のジェイムズⅡ世派反乱事件に取材した「釈放の命令」(1852-3年)だけだったようで、これにしてもラスキンの妻のエフィーがミレイのもとに去り、二人が絶交したいというスキャンダルがあったら注目されたのかも知れない。バーン＝ジョーンズの特別な要望があって、三人はアルポーニが出ていたマイヤーベーヤ作曲の「預言者」を聴きにオペラ座へ行った。「バーン＝ジョーンズはまったく有頂天になったが、モリスは随分と退屈したようであった」とフルフォードは報告している。ノートル・ダムではモリスが二人に警告していた通り、彫刻が「半ば取り外され、ポーチの下で残骸となって無雑作に置かれていた」し、サント・シャベルでは、修復がまさに絶頂にあるのを見ることに終わった。

ルーヴルではモリスがバーン＝ジョーンズの目を閉じさせ、ゆっくり見る前にアンジェリコの「聖母の戴冠」の絵に直行させた。それでもバーン＝ジョーンズは有頂天になった。しかし「モリスはパリではいつも落ち着くことができなかったので、一行は三日後にそこを発ち、シャルトルに二日間滞在し、その間はほとんどシャルトル大聖堂のなかで過ごし、それから北のルーアンに向った。途中は見つけられ次第に教会に立寄ってゆっくりと旅をした。8月10日はアヴァランシュからモリスはプライス宛に有頂天になって喜んだ様子を手紙に書いている。「…昨日のモン・サン・ミッシェルで教会は見終わった。これまで見た教会の素晴らしかったこと…幾つか入れ忘れてるのもあると思うが、24の教会は思い浮かぶ。その内の幾つかはイングランドの第一級の大聖堂より勝っているんだ」⁽¹³⁾。アヴァランシュから彼らは鉄道でメンテノンに行き、それから小さな一頭立て馬車に乗って、美しい田園地帯を通過して、約17マイルの距離を進んだ。それからルーヴィエ経由でルーア

ンに着いた。ルーアンは依然として美しい中世の都市であった。そこへしばらく滞在し、心を満した。それからコードベックまで歩いて行き、カルヴァドスの諸教会へ行くためにル・アーヴルまで乗合馬車で行った。バーン＝ジョーンズとモリスが将来に聖職者になるのではなく、芸術に生涯を捧げようという決意を固めたのは、この休暇の終りの8月の夜の遅い時間にこのル・アーヴルの波止場を歩いていたさいのことであった。学生生活をできるだけ早く切り上げ、バーン＝ジョーンズは画家の道を、モリスは建築家の道を進もうと決心したのである。「それは最終的な結論だけを要する決意だった」とバーン＝ジョーンズは言った。「私たちは、それまでのまる一年間というもの、その進路に傾いてきていた。そしてその夜の話し合いの後は、もう躊躇することはなかった。私の人生のなかでそれは最も記念すべき夜だったのだ」。このように目標がはっきりしてきたので、モリスはイギリスに帰ってからすぐにバーミンガムへ行きバーン＝ジョーンズの所に厄介になった。そこにはフルフォードとプライス、それにインド勤務の文官に採用が決ったばかりのウィルフレッド・ヒーリーも来ていた。バーミンガム滞在中の三週間は「猛烈な読書に会話」、そして雑誌についての議論で費やされた。プライスの日記の9月7日にはテッドとトップとフルフォードがやって来てお茶と夕食を共にし、建築と労働の組織についてトップと大いに語り合った時のことが書かれている。当時の書評全般の論調、とりわけ『ブラックウッド』のものについて彼らは議論した。それは1817年創刊の保守的な月刊雑誌『ブラックウッズ・マガジン』に載ったテニスンの『モード』の書評のことで、それがこの一団を大いに憤慨させたのであった。「彼らの雑誌では、ひけらかしや皮肉や冷笑や個人攻撃を絶対なしにしようということで全員一致した」という。なにしろ『モード』は彼ら全員が賞賛する詩であったからである。プライスの9月9日の日記には「テッドとトプシーと会った。書評のを中心にして話をした。政治問題はおおむね避けるようにし、主として物語、詩

作, 好意的な批評, 社会問題についての論説といった内容にすること」と記してある。

『バーン＝ジョーンズの回想』(1904年刊)によると『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』を彼らの主義主張及び夢中になっている事柄を表現するための媒体として, また創作の発表の場として発刊しようと発案したのはデクスンであった。プライスの日記にはヒーリー宅での集りのことにも言及されていて, そこではカーライルの『過去と現在』と『フランス革命』が話題の中心になったという。モリスとバーン＝ジョーンズは二人になると, 彼らは自身の想像世界のなかで互いに交わった。バーン＝ジョーンズは「想像力がある限り私の仕事は終わることがない。私は, 現実世界よりもさらに真実である, あの不思議の国をいつでも旅しているのだ」と述べた。そしてその時に, その不思議の国の一部のように思われる一冊の書物を見出したのであった。それがトマス・マロリーがアーサー王伝説を集大成した『アーサー王の死』(1470年頃完成)という本であった。文人のロバート・サウジーが編纂したサウジー版『アーサー王の死』(1817年)をある日, バーン＝ジョーンズはコーニッシュ書店で見つけたのだが, それをすぐには買えなかった。35年後にバーン＝ジョーンズは「くる日もくる日も書店でそれを立ち読みし, 店主の機嫌を損わないように, 安い本をよく買ったものだ。しかしモリスがこれを見てすぐに購入し, 白いヴェラムで装丁してもらい, それで長い間楽しませてもらった」と書いている。しかしこの本に対する二人の愛情と崇敬の念は非常に強いものであったので, 二人ともたとえ親友の間柄といえ, 気恥かしくて話題にはほとんどできないくらいであった。

それから一年後に世界で最も偉大な書物が聖書と『アーサー王の死』だとロセッティがいうのを耳にして, 二人はやっとこの本について自由に語り出すようになった。ジョージアナはこのように書いている。「その書物が, あの二人に愛されたように, 愛されたことはかつてなかっただろうと私は時々思う。バーン＝ジョーンズにとってそれ

は, 文字どおり彼自身の一部と化していた。その強さと美しさ, その神秘的な宗教と高貴な騎士道的行ない, 人名や地名に潜む失われた世界—それは彼が相続した彼自身の生得権だったのである」。それはまたモリスの著作である『グウィネヴィアの抗弁』のかなりな部分の発想にも豊かさを与えた。このモリスの詩集には, これ以後に二度と取り戻せない, 燃えるような想像力の強烈さが備った。

モリスは二, 三週間バーミンガムにいて, 国内の多くの開発業者によって事実上, 破壊されてしまったウスターに行ったので, バーン＝ジョーンズは長く御無沙汰してしまったハリス・ブリッジへ出立した。しかし, かの貴重な書物はバーン＝ジョーンズのところに置いておかれたようである, というのもプライスが「バーミンガムでも何回も庭を巡り巡り, テッドは『アーサー王の死』のパーシヴァルの妹とシャロット姫の死について書いた章を読んだ」という記事を書いている。モリスは建築家になる決心をしたので, ジョージ・エドモンド・ストリートに手紙を書いた。彼は学位を取らずに大学を去るつもりであったという印象を与えていたことは明らかで, 9月28日付の日記でプライスは「オックスフォードを中退するなどということを考えているモリスに, 厳しい批判の手紙を便箋二枚に綴って送った」と書いている。一週間後にモリスはこのような返事をよこしている。「私は来学期戻るから安心してくれ。きっと戻る。もっとも母親のためにそうするのでなかったら, 辞めていたところだがね」。デクスンもしばしば手紙を書いていたので, 彼がいなくても情報の橋渡しは行なわれ, 観劇に行くことで時には変化もつけられたが, 彼らの集りはいつもの通りに運行された。ある夜はフルフォードの家に集って夢や霊の話になってフルフォードはまだ名称がない雑誌のために書いた物語を彼らに読んで聴かせた。それから話は「中世と現代における健康の比較」になったりした。ある晩などは「機知というよりはユーモアが先行して, 戯れが暴れ回り, バーン＝ジョーンズなどは悪ふざけが前に

出ることもあったようである。「大方の仲間が馬鹿な笑い話に巻き込まれた」というのが率直な意見であった。学期が始って一週間したら「テッド（バーン＝ジョーンズ）がオックスフォードを辞めて、すぐにも絵画を始めようと思っているらしい」ということが話題になった。同じ頃にバーン＝ジョーンズが家に書いた手紙の一部が、その噂の原因と受け取れる。「ここでは皆が健康です。彼らと私は毎夕か、もっとそれ以上に会っています。晩は楽しく過しているのですが、私たちの多くがオックスフォードには哀しいかな飽き飽きしていると思います」。ル・アーヴルの夜以来、バーン＝ジョーンズとモリスがオックスフォードを去ってただちに絵画と建築の修業をしたいと望んでいたことは確かであったが、それを情け容赦なく実行することはできなかった。彼らは自分たちが愛している両親のことも考えねばならなかったのである。ジョーンズ氏は確かに息子が牧師でなく、芸術家になるという知らせを受けたが、息子が望んでいることに長くは反対しなかった。バーン＝ジョーンズはオックスフォードの仲間以外にその困難な解決を求めた。「私は今日、将来の見込と職業についてよく話すために、マクラレン氏と一緒に食事をした。可能なら今すぐにも問題の決着をつけたい。というのも、対象を明確にして問題に取り組めないのは疲れることだから」と書いている。学期末にはついに彼は「来年の6月に学位を取得して、早速にも暮しを立てよう」と自分の意図を宣言した。

この学期でバーン＝ジョーンズにとって一番重要なことはロセッティの素描「エルフェンミアの乙女たち」を原画とする、彼の弟のダルジル（彫版や製図などの出版社を経営していた）の木版画をウィリアム・アリンガムの詩集『昼と夜の歌』（1854）に見出し、ただちに彼も版木の上にデッサンして下絵を彫り込む作業に着手した。だがロセッティの方はそのダルジルの木版画には嫌悪を感じていたという。それでもこの木版画は、その不思議でロマンチックな魅力を湛えており、ラファエル前派に追従したアーサー・ヒューズの奇

麗だが感傷的に過ぎる挿絵とは対照的であった。もっとも、アリンガムの詩の精神をヒューズの方が忠実に表していたとあってよい。バーン＝ジョーンズにとっては、近代的な絵画表現において自分の想像力が内面で燃えているのが一見して分かるように大胆に用いれば、美をどれくらい多く表わして制作すべきかの問題が一掃されそうに思えた。当時彼がその下絵について言ったことからすると、彼は決して方向を変えるようなことはしなかった。「それがこれまでに私が見た挿絵でとりわけ美しい素描であったと思う。〈エルフェンミアの乙女〉の怪奇さや、彼らが歌いながら動かしている腕の音楽的な律動感のある運動や、人々の顔の表情などは、とりわけ偉大な芸術家しか想像できないものである」。バーン＝ジョーンズの絵画は彼自身の表現であり、この彼の姿勢は「エルフェンミアの乙女」を見る前から、それを見た後も変らなかった。

マクラレン氏の本のために制作した下絵はいまだに彼の家族の所有にあり、とりわけ興味ある存在であるが、その計画には口絵、標題紙と挿絵、装飾文字も含まれている。それらに着手されたのは、1854年でその後二年半は続けられた。それで木の葉や枝を描きにワイタムの森に行ったその時から、彼が人物像をそれ以後に用いる言葉の初歩であると発見する日までの一連の絵に、彼の発展過程を辿ることができるであろう。仕事に専念しているさいのバーン＝ジョーンズについての話をマクラレン氏の娘が父親から繰り返し聞いているところによると、ある朝早く、寝室の窓に砂利が当たる音で目を覚まして、外を見たらバーン＝ジョーンズがやつれた顔つきで庭に立っていたので「どうしたんだ。何の用事かい」と聞いたら。「マック、降りて来てくれ。一晩中起きていて、その絵にかかっていたのだが、どこが悪いのか見してくれないか…」と言ったという。マクラレン氏は降りていって、その素描にぐいっと目が新しく引き寄せられて、彼がオックスフォードへ帰る前に暗示できたものが何か理解できたということである。

モリスは1855年の秋に優等卒業試験に無事合格し、ボウモント街にあるストリートの建築事務所で翌年の初めから勤め出す準備を整えていた。その間に『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』の準備は着々と進んでいた。プライスは11月22日付けの日記に「トップと骨折って雑誌の創刊の趣意書をこしらえた。晩にペンブルック・カレッジに行き、趣意書の作成を続行。フルフォードが入ってきて仕事をみんな一人占めにした」。この趣意書が他のすべての月刊誌に掲載された。9月にハリス・ブリッジを訪問したのがバーン＝ジョーンズに特に楽しかったのは、彼の従姉妹のマライア・チョイスとの友情を再生できたことであった。その後彼女と交わした手紙でバーン＝ジョーンズは「私たちは今や活動のための用意万端を整え、7名だけになった兄弟団として団結しました。モリス氏が発行者です。彼に費用を相当額負担してもらうことになりそうです。というのも、年間の発行費は、時々入れる予定の図版を除いても、最低500ポンドはかかるからです。出費は300ポンドに押えたいと彼は望んでいますが、それだって、随分の額です。…儲けになる雑誌ではありませんが、私たちは希望に満ちています。ケンブリッジの最も有能な若い書き手の二人が私たちに加わりましたし、オックスフォードの寄稿者の三人についていえば、彼らに匹敵する者は世界中を捜しても、そうざらにはいないでしょう」と書いた⁽¹⁴⁾。

その内容はエリザベス朝詩人のフィリップ・シドニー卿についてのヒーリーの長編エッセイの初回分、フルフォードのテニス論、バーン＝ジョーンズの「いとこ同士 ーある物語」、モリスの初期散文ロマンのなかでとりわけ良い「知られざる教会の物語」、ディクソンの「ライバルたち ーある物語」、さらにマクドナルドのインディアンの英雄を描いたロングフェローの物語詩『ハイアウァザの歌』についてと、バーン＝ジョーンズのサッカーの『ニューカム一家』(1853-5年刊)について、それからヒーリーがキングズリの説教集について書き、そしてモリスの詩「冬景色」の

一編が載る予定であった。次号ではハリス・ブリッジで始めた物語は続きません。あれは長い間、とっておくべきものです。次号の内容はフィリップ・シドニー卿のテニス論(続編)、バーン＝ジョーンズの「北国の話」、モリスのフランス教会のエッセイ、ディクソンの「戦争」、ヒーリーの「マコーリー評」、ヴァーノン・ラシントンの「カーライルについてのエッセイ」などを載せる予定ですが、他はまだ決っていません。私は彫版による図版も、と希望しています。いうまでもなく私は兄弟団の永久の美術家として定着します。月が進めば生死を問わず、ありとあらゆることを扱い、色々な偉大な人物についての記事も載せたいと願っています。三月号ではラスキン、四月号にはフケを紹介するつもりです。創刊号をお送りしますが、予約購読されても満足いただけるものと思います⁽¹⁵⁾。

その創刊号が出たのは1856年元旦であったが、二段組72頁で、活字をぎっしりと詰めて印刷してあった。さらに彼の手紙は「モリスが書くのにはすべて注目して下さい。彼が手を触れたすべてに、この世で非常に純粋でとりわけ美しい精神が息づいてるのを見出すでしょう。時には私が彼の友人であることを残念に思うこともあるのです。というのも、彼のことをあまり褒めるとえこひいきの責を免れません。しかし彼が見知らぬ人であれば、執筆の山積みから、今でも彼のを探し出し、彼の偉大さに注目して当然なのです。フルフォードもです ー彼が書くすべてを信用してもよいでしょう。彼は真実に関して見事に引きつける影響力がある、真面目で深みのある思想家です。…彼はモリスのようにあまり詩的にも、美しくも、目の前に見えるようにも書きませんが、議論となると彼の右に出る者はいません。すぐ彼と分ります。ディクソンは女性たちが言うように、とても興味あるもう一人のいい奴です。色白の顔と暗めの髪の毛、美しい眉に憂いをたたえた低い声で話す、彼も詩人なのです。彼の性格のロマンチックなところに水をさしたらいけないですが、どうしても言っておきたいのは、彼は心からの愛煙家なので

す。ヒーリーときたら、かなりひどい奴です。何でも知ったかぶりで〈誰にも分らない〉という言葉伝えを〈ヒーリーしか知らない〉と言い換えて彼の性格にまとわせたくらいです。ばかでかい口髭、男前でなく、なんでも気まずくしてしまい、ケンブリッジの名誉をひけらかすのです。マクドナルドは補欠のようなもので、要員が揃ったら、彼は辞め、彼の代りに二人の巨漢が入るでしょう。フォークナーですが、若い彼の容貌はオックスフォードが複数年与えた一番重要な栄光を纏っているのです。もう一人はラシントンというケンブリッジ出の人物です。まだ紹介していませんでしたが、彼はすでに作家で非常に優れた人だそうです。ざっと私たちの兄弟団の要員はこういった顔ぶれです。世間に良いことをしようと、新しい哲学で、しかもとりわけ強い団結をして新しく出発するのです…」。

バーン＝ジョーンズの小説「いとこ同士」はこのように始る。「レディー・レーシーの舞踏会の夜に人々は楽しげに滑るように踊っていたが、語り手〈私〉はうっとうしくて踊ろうともしない。若い男たちに囲まれている美しい娘ガートルードは私の従妹で、婚約者だが、なぜか皆の前では冷たい態度を見せている。最近、彼女の私に対する心は冷えてしまったらしい。頭痛を口実に舞踏会を辞した私は、暗い夜の街をさまよい歩き、貧しい人たちの居住する界隈に紛れ込み、いままで知らなかった人生を私は知る。酔った夫に虐待されて路上に倒れ、抱いていた子供を死なせてしまう女。貧困で子を餓死させてしまった母親、母親と家出をしようとする娘との争い。私はあり金を全部与えて立ち去る。ウォルター橋の欄干にもたれて暗い川面を見下ろした私は、無数の群衆の苦しみと町のありとあらゆる声なき恐怖がつまった沈黙の闇の流れを見つめる。その後も橋の上の夢を頻繁に見るたびに、果てしなく続く岸には夥しい人間がひしめき、水面に向かって歎願の手をさし延べるが、一度もやって来ない。いや、救いを求めても決してやって来ない、涙しながら眼をこらしてじっと待っているだけである。人生を見る目の

変った私が夜明け近くに帰宅すると、息子を待ち侘びながら父親は死んでいた。慌ただしく葬式を済ませ、私はフランスへ渡る。夢遊病者のようにさまよい歩き川に落ち、我に返ったときは、見知らぬ家で美しい少女に看病されていた。その少女は英語を話した。彼女の父親が私を助け出したのだが、すでに亡くなっていた少女の母親はイギリス人で、私と少女は従兄妹同士であることが分かった。やがて二人は結婚する。今の私はまったく幸福である。なぜなら私の庭には一本の美しい木が育っているからだ。私の魂はもう惨めな思いを味わうこともなく、昔の悲しみに傷つくこともなく、その庭を散歩する。ただめったにないことだが、時々、閃光のようにほんの一瞬、閉じ込められていた記憶が突然に封を破り、錠を壊して現れる。するとまた暗い水辺を歩いている…そんなとき、私は記憶のない時間の暗示と痕跡をたぐり寄せるが、私の生涯には失われた一年がある」というようなロンドンの当時の暗黒の裏面に触れた同時代の小説であった。

彼の他の二編は小説というよりは、物語であって、その一つは「北国の話」、最も長いもう一つは「ドゥルイド教徒と乙女」というので、舞台も北欧、アイルランドとブルターニュというケルトの薄明の世界、主題は美女をめぐる男たちの争いで、その部族間の、あるいは国どうし、あるいは英雄と悪しき強者との闘いが織りなされ、時代も遙か中世の昔である。モリスと同じような象徴性を帯びた中世ロマンの世界を展開させたもので、後のバーン＝ジョーンズの絵画とほぼ重なるものである。しかしバーン＝ジョーンズ美学の水底を作者自身が気がつかずに表しているのは短編の「いとこ同士」の方である。その主人公はフランスへ渡り、そこで魂は少女に救われるが、何度も夢にまで追いかけてくるウォルター橋の闇のなかで、人々の上げる無言の叫び。その失われた一年の時間が主人公の生涯の心の片隅に座りつづける。舞台はロンドンであるが、これはまさに彼の幼い頃のバーミンガムと重なっているような気がする。その話についてディクソンの記憶によると「バー

ン＝ジョーンズが文学的能力を持っていると最初に考えたのが、オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジンの創刊号を発行しようとしていた時のことであった」という。またその二、三日後にフルフォードが「豪華な話を書いたものだ、彼は」と言ったが、その彼とはバーン＝ジョーンズのことであった。その日の晩にフルフォードの部屋に私たちは集った。バーン＝ジョーンズはそこで「いとこ同士」を朗読した。居合せた皆は物も言えないほどびっくりした。書かれた文章は堂々として美しく、繊細な語法や書いた内容が示す心の優しさを感じたとディクソンがいう。彼はバーン＝ジョーンズにそれほどの文才があるとは考えていなかったのである。

ルーアンでバーン＝ジョーンズとモリスはサッカーのタウフニッツ社最新版の『ニューカム一家』を見つけて熱心に読んで見て、かのバーン＝ジョーンズの手紙にあった創刊号のエッセイを書くことになったのであるが、数年後にバーン＝ジョーンズはこれらの初期の著述に関して神経質になり、可能ならすべての言葉を一掃したいと洩した。しかし彼が放棄したいとした文学的能力はオックスフォードで、カレッジ・フォア・イングリッシュ・エッセイの門に彼の名前がしばしば「揭示」されたり、私的通信にはいつも載っていたことからして、十分に認められるものであった。画家になってから彼は、絵画以外のどんな表現手段も用いることに、ある種の嫉妬を感じたように思え、故意に言葉で公表することを抑制したように考えられる。彼は演説したり記事を書くように誘われても一斎応じなかったという。

彼の『ニューカム一家』についてのエッセイの一部が芸術の言葉の要点を明確に表しているのも、そのほんの一部だが引用しておく方がよいであろう。「人は詩を読むのと同じように、善良な考えが外からの影響で潰される心配がないように、私たちの心を養ってくれる人間性あふれる心の小さな原子をいつ頃から絵のなかに見つけて、その物語りを読みとるようになるのであろうか。これらを人々が捜し求め、芸術家が彼らを満足させるの

は何時のことであろうか」。また他のところでは、とくに書物の挿絵について「芸術家はたとえかすかであっても、他の誰かの考えの反響であってもいけない。共働するか予言するか、意味深い発言であるべきである」。

オックスフォードの仲間にエドワード・ラシントンが加わったが、なぜ彼が引き入れられたかをヒーリーがこのように述べている。「ラシントン博士（教会裁判所の偉い人物）の息子で、トリニティ・カレッジで知っているなかで一番陽気な人物の一人である。息子のラシントンは三年間は海軍少尉候補生で、インド洋を巡航し、アラブ諸国などとの合戦にも加わった後にケンブリッジに来て、古典や数学の山積する問題に武器をとった人物であった。彼は心底から率直で、陽気で、水夫のように正直で熱狂的であったが、極端に急進的で、広くはないが政治経済や道徳的原理の問題のすべてに大きな関心があって、プラトンやワーズワース、それから特にラスキンの熱烈な賞賛者であった」。

バーン＝ジョーンズは新年に叔母を訪ねてロンドンへ行ってバーミンガムへ帰り、後の二、三か月は優等試験のために家で読書しながら静かに過す計画であった。クリスマスを父親と一緒に過すために帰ってきたときは、彼自身にもまだ、自分が事実上オックスフォードから離れてしまっていることが分かっていなかったのである。

注

1. "Memorials of Burne-Jones", Georgiana Burne-Jones, Lund Humphries, 1993, vol. 1. p. 97.
2. "Visionary & Dreamer", David Cecil, Princeton University Press, 1969. pp. 106-7.
3. Georgiana Burne-Jones, op. cit., p. 88.
4. Ibid.
5. Georgiana Burne-Jones, op. cit., pp. 95-6.
6. "William Morris: his Life and Friends", Philip Henderson, Penguin Books, 1973. p. 32.
7. Henderson, op. cit., pp. 32-3.
8. Georgiana Burne-Jones, op. cit., p. 100.

9. Georgiana Burne-Jones, *op. cit.*, p. 102.
10. Henderson, *op. cit.*, p. 35.
11. Henderson, *op. cit.*, p. 43.
12. Georgiana Burne-Jones, *op. cit.*, p. 113.
13. Henderson, *op. cit.*, pp. 44-5.
14. Georgiana Burne-Jones, *op. cit.*, pp. 121-2.
15. Georgiana Burne-Jones, *op. cit.*, pp. 122-3.